

(PDF版・7の4)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」

(文責・豊田忠義)

「二十一節 教会における自由——二 言葉のもとでの自由」 (491-501頁)

「二 言葉のもとでの自由」

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において現存している聖書によれば、「自由、主権」は、「神ご自身においてのみ实在であり真理である」。したがって、その起源的な第一の形態の「神の言葉の下での自由〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書における神の言葉の下での自由〕」、その「神の言葉の下での〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の中での人間的自由」は、その「神の言葉の自由を通して基礎づけられた自由である」。したがってまた、その神の言葉の下での教会における「人間的な自由」は、「神的な自由を傷つけ、侮辱することはあり得ない」それである。何故ならば、「神ご自身においてのみ实在であり真理である」全き「神的な自由」は、神の言葉の下での「人間的な自由に対して、常に、あらゆる点で、先行する……」からである。その「神的自由は、〔その〕人間的自由を破壊するとか除去するということもあり得ない」。何故ならば、先ず以て第二の問題である神の本質を問う問いを包括した第一の問題である神の存在を問う問いを要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、「神的自由」が、神の言葉の下での「人間的自由を、常に、あらゆる点で自分の方に、自分のところに、引き寄せる」からである。この「神的自由」については、(PDF版)「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード、(その3)キリストにあつての〈神の自由〉」を参照されたし。したがって、その常に先行する「神的自由」は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の成員一人一人に対して、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」(通俗的な意味での「隣人愛」ではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え)という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公

同ノ教会」共同性を目指して行くところの、「個々の決断とその人間性における、神の言葉に対する在り方、態度を生起させることができる」し、キリストにあつての「啓示を感謝と祈願をもって受け取ることを生起させることができる」。したがってまた、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会のすべての成員は、終末論の限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、「共に知る者として、立っている」。このような訳で、「神の言葉」は、「ただ単に〔「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の〕神の言葉であり続けるだけでなく、またただ単に〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である〕使徒および預言者の言葉であり続けるだけでなく、〔聖書を媒介・反復することを通じた第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会のものとなるように自分自身を与え、したがって〔イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の肢体である成員によって取り上げられ、受け入れられ、その限りそれらの者自身の言葉〔教会の＜客観的な＞信仰告白および教義Credo〕となる……。そのような仕方では、「神の言葉の下での自由における言葉」は、それぞれの時代において、その時代と現実に強いられながら、「神の言葉の中に基礎づけられ、それに拘束されているまことの神の言葉の注釈〔生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」としての「例証」ではないところの、あくまでも聖書を媒介・反復することを通じた「解釈」と適用にまでくる〕。バルトは、『説教の本質と実際』で、次のように述べている——「第一の来臨〔生誕・死と復活〕と第二の来臨〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」〕との間〔中間時、聖霊の時代〕に、説教と、また同時にキリスト者の生活全体とがある」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の「説教」は、説教者の自由事項や決定事項ではないのであるから、「自分自身の言葉から由来すべきではなく、どのような場合であれ、その形式と内容において、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書への絶対的信頼に基づく、聖書講解であることの義務を負っている」、それ故に第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の「説教者が、実際の生活にはなお多くのことが必要であつて聖書は生きるために必要なことを言いつくしていない〔近代的な人間の感覚と知識を内容とした経験的普遍、情報が不足している〕と考えるようなことがある限り、彼は、この信頼、信仰を持っておらず、真に信仰によって生きようとしていない

のである」、**「三位相互内在性」**における**「失われない単一性」**・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その**「外に向かって」**の外在的な**「失われない差異性」**における第二の存在の仕方、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事——**「啓示ないし和解の實在」**そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、**「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」**まことの神にしてまことの人間イエス・キリストの**「福音は、われわれの思考や心情の中にあるのではなく、**
〔第二の形態の神の言葉である〕**聖書の中にあるから、われわれは、思想、最高の習慣、最良の見解、そのようなものいっさいを、聖書に聴従することの前で、放棄しなければならない」、****「聖書は、〔起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいて〕神の言葉となるところで、聖書は神の言葉である」、と。**

(1) 起源的な第一の形態の**「神の言葉の下での自由**〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書における神の言葉の下での自由〕、その**「神の言葉の下での**〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会の中での人間的自由**」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その**「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」**の<総体的構造>に基づいて、常に自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準である**「聖書を、注釈**〔「例証する」のではなく、「解釈する」こと〕**し適用する<責任>を引き受けることにある**」。**「イエス・キリストにおける神の自己啓示」**については、(PDF版)「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード、(その1) <イエス・キリストにおける神の自己啓示>および<その自己証明能力の総体的構造>ならびに<まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会>」を参照されたし。それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする**「神の言葉の三形態」**の関係と構造(秩序性)からして、第二の形態の神の言葉である**「啓示との<間接的同一性>」**において現存している**「聖書を注釈し適用する<責任>を引き受けること」**は、第三の形態の神の言葉である教会(すべての成員)にとって、**イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すことにある**。何故ならば、全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすところの、あの**「神への愛」と、「神への愛」**を根拠とした**「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環における純粋な教えとしてのキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えが、「もろもろの誠命中の誠命、われわれの浄化・聖化・更新の原理、〔第三の形態の神の言葉である〕教会が〔全世界としての〕教会自身と世に対して語らねばならぬ一切事中の唯一のことである」**からである(『福音と律法』)。**「神の言葉」**は、そのような仕方で**「聞かれるようになることを欲している」**。したがって、神の**「み言葉が欲しているこの意欲に対して、教会の成員は、まさにこのみ言葉の中に**

基礎づけられた自由の力によって、何も参与しないで、受身的な〔傍観者的な〕、ただ待っているだけの態度をもって、（そのみ言葉に対して）相対して立っていることはできない」。何故ならば、第二の形態の神の言葉である「聖書を通して、〔第三の形態の神の言葉である〕教会が基礎づけられ、保持され、支配される……出来事が起こり、教会の成員たちが、聖書に対して責任を持つようになる出来事が起こった時には、その出来事は、教会の成員たちが、その出来事の主体となるという仕方で起こる」からである。その時には、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「われわれ自身が、今や、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉が〔それ故に、具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書の中での神の言葉が〕、〔全世界としての〕教会の中で・世の中で、さらに先へと道を進む……その場にいるのである〔聖霊の業である「啓示されてあること」、**「キリスト教に固有な」類と歴史性の場にいるのである**〕」。それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通じた第三の形態の神の言葉である**「教会を通して、教会の中へと呼び出される時、われわれ自身が、召命が存在するところの教会と……なる時、ほかならぬわれわれ自身が、教会となったのであり、そのような者として、教会の将来の存在に対して責任あるものとされたのである。……われわれは、〔全世界としての〕教会の中で・また世の中で、〔われわれの思惟と語りと行動における原理・規準・標準としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している〕聖書が生き、支配し続けて行く大いなる進行に、共に責任ある者として参与している者とされたのである**」。このような訳で、「われわれは、〔生来的な自然的な、人間の自由な内面の無限性、人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を認識し自覚した〕自分の舌でもって教えるべき奉仕の務めについた人たちのような大言壮語（ヤコブ三・一以下）する者とされたのではないのである」。

「人は、**先ず第一に、繰り返し、**（中略）〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の**受肉**〔その内在本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉〕の**秘義と奇蹟全体のことを**、〔「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」における〕人間イエスの**現実存在とイエスの完結した預言者としての務めを**、さらにまたイエスによって**全権を委ねられた証人たち**〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たち〕の**現実存在の謎全体のことを**、よく考慮に入れなければならない……。われわれは、この「理解を絶した神の卑下と人間の高揚を、まさにこの〔啓示の〕真理の中でのみ〔神のその都度の自由な恵みの

神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて「みてとらなければならない〔認識し信仰しなければならない〕……」。したがって、第三の形態の神の言葉である「教会（すべての成員）」は、その「理解を絶した神の卑下と人間の高揚」を、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、その中でのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、「実証しつつ、確かめなければならない……」。第二の形態の神の言葉である「聖書」は、それぞれの時代において、その時代と現実に強いられただ中で、その「客観的な明瞭さにおいて、〔終末論的限界の下でのその途上性の中で〕繰り返し聞えるようになり、聞かれるために、解き明かしされることを欲している〔説明されることを、解釈され適用されることを欲している〕」。この事柄は、「神の言葉の下での〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の中での人間的自由におけるすべての人間的な責任の前提である」。何故ならば、「神の言葉の下での〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の中での人間的自由」における「われわれとしてなすべき責任がある聖書の解き明かし」は、「ただ〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している〕聖書が、神の言葉として、自分自身の中で明瞭であり、自分自身で客観的な明瞭さを持っているということに基づいてだけ、企てられることができる」からである。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が、第二の形態の神の言葉である「聖書の権威と自由を剥奪し、聖書の権威と自由を相対化して」、聖書を支配する仕方です。「先手を打って処理することは許されないのである」、換言すれば第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）からして、そのすることは許されないのである。第三の形態の神の言葉である「教会（すべての成員）」は、その人間性と共に神性を賦与され装備された聖書の中での神の言葉は、「人間的な言葉という形態も持っている。そしてこの人間的な言葉の方は、〔それぞれの時代において、その時代と現実に強いられただ中で、〕説明（解釈と適用）を必要としている」。この時には、吉本隆明の次のような思惟と語りは、客観的な正当性と妥当性を持っていると言うことができる——「……〈奇跡〉（中略）たとえば、お前は癒された、立てといたら癩患者が立ち上がった……。これは自分流の言葉〔詩、文芸批評、思想の言葉〕でいえば、比喩なんです。比喩の言葉というのは、あるばあいにはストレートな真実の言葉よりもっと真実を語るということがありうるわけで、これを実在論に還元してしまうと、田川健三はそうだとおもいますが、こんなのでたらめじ

やないか、こういういいかげんなことを書いてる本だという以外にないわけです。しかし、言葉としての聖書というのは、＜信仰の書＞として読んでも、＜文学書＞として読んでも、あるいは＜思想の書＞として読んでも、どんな読み方をしようと人間をのめり込ませる力があるとなれば、これは叡知じゃないとこういうことは言えないという言葉が、そのなかに散らばっているからです。たとえばイエスが、『鶏が鳴く前に三度私を否むだろう』と言うと、ペテロはそのとおりにちやっぴなエピソードをとっても、人間の＜悪＞というのが徹底的にわかっていないとだめだし、心というのがわかっていないとだめだし、同時にこれはすごい言葉なんだというのがなければ、やっぱり感ずるといえることはないとおもうんです」（『＜非知＞へ——＜信＞の構造 対話編「吉本×末次 滝沢克己をめぐって」』）。イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、キリストにあつての啓示は、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて、自己証明を行う。そして、その「啓示は、例証されようとせず、解釈されることを欲する」し、「解釈するとは、別の言葉で同一のことを言うことである」が、ここで「解釈する」とは、第三の形態の神の言葉である教会（すべての成員）が、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準として、それぞれの時代において、その時代と現実に強いられた中で、「別の言葉」で、「＜同一のこと＞を言うことである」、すなわちそれは、あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すことである、そういう仕方で全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるために、キリストの福音を告白し証しし宣べ伝えることである。例えば、そのことを目指したバルトが、バルメン宣言を総括して、一方で、「**バルメン宣言の本文は、福音主義教会が、その信仰告白という形で**〔すなわち、その時代と現実に強いられた中で、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すところでなされた、第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白という形で〕、あらゆる自然神学の問題と対決した出来事の＜初めて＞の記録であった」というその宣言の＜良き成果＞（「キリスト教に固有な」類の深化、豊富化）について述べ、しかし他方で、「ユダヤ人問題を『決定的に重要なものとして組み込まなかった』ことを、『重大な失敗』だと考えるようになった」と述べているのであるが、前者の＜良き成果＞の面は、その時代と現実に強いられた中での第二の形態の神の言葉である「聖書の……説明（解釈と適用）」を意味していると言うことができるのである。このバルトのバルメン宣言

の「あらゆる自然神学の問題と対決した出来事の〈初めて〉の記録」というバルトの総括は、キリスト教的な信仰・神学・教会の宣教における〈最後のな問題〉が、自然神学の問題、自然的な信仰・神学・教会の宣教の問題を止揚し克服する問題として、換言すれば自然神学の問題、自然的な信仰・神学・教会の宣教の問題を明確に提起する問題としてあったし、あるし、あり続けているということを意味している。したがって、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「教義学的な合理主義を明確に否定し」、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、キリストにあっての啓示、啓示の真理、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、啓示神学の立場に立脚して、キリスト教的な信仰・神学・教会の宣教における〈最後のな問題〉、すなわち「あらゆる自然神学」、あらゆる自然的な信仰・神学・教会の宣教の問題を明確に提起したバルトは、最後の宗教改革者なのである。

それ自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の「神の言葉が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書の中で人間的な言葉の形態をとったことによって、神の言葉は、自ら、この説明〔解釈と適用〕を必要としている状態におもむいたのである」。したがって、「**神の言葉の下での**〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会の中での人間的自由におけるわれわれ人間的な責任**」は、「**聖書を解明する部分的な責任**」は、終末論的限界の下でのその途上性において、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、それぞれの時代において、その時代と現実に強いられた中で、「**聖書を説明する**」、「**聖書を解釈し適用する**」点にある。しかし、この「〔第三の形態の神の言葉である教会に属する〕**われわれとしてなすべき責任がある聖書の解き明かし**は、〔それぞれの時代において、その時代と現実に強いられた中で、〕**ただ聖書が神の言葉として自分自身の中で明瞭であり、自分自身で客観的な明瞭さを持っているということに基づいてだけ**〔それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準としてだけ〕、**企てられることができる**」。このようなイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中でのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している「**聖書の人間的な言葉の〈自己説明〉**は、**概念の狭い意味での……われわれの責任として委任されてい**

る聖書の解き明かし〔説明（解釈と適用）〕……の一つの前提を形成している」。その「聖書の解き明かしは、出来事として起こる〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事に基づいて起こる」〕」。その時には、第三の形態の神の言葉である「教会（すべての成員）」は、生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に「わがまま勝手な解き明かしをなすことは許されていないのであって、〔前述したような〕客観的な手引きを必要とするのである」。したがって、第三の形態の神の言葉である教会（すべての成員）における思惟と語りと行動が、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではない」、それ故にそれは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈り」の態度〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」。この応な訳で、そこで、「狭い意味でそう呼ばれるべき聖書説明〔聖書解釈と適用〕の必要性が始まるし、またそこで、〔第三の形態の神の言葉である〕教会の成員に対して課せられている責任が始まってくる」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会の成員**」は、「語る者と聞く者の間に、したがって〔第二の形態の神の言葉である〕**聖書の人間的言葉**と〔第三の形態の神の言葉である〕**教会のほかの成員の間に、……また聖書の言葉と世の中の人間の間に、両者を助けるために割って入るところのあの第三者**〔全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えを行う、「人間に対する奉仕者」、「聖書に対する奉仕者」としての**第三者**〕であるように召されている」。われわれは、「ポラーヌスが聖書解釈についてなしたよい定義に注意を向けることにする」——それは、第二の形態の神の言葉である「聖書解釈トハ、ソノマコトノ意味ト使用ニツイテノ説明ノコトデアルガ、ソレハ〔それぞれの時代において、その時代と現実とに強いられた中で、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、〕明白ナ言葉ヲ用イテ神ノ名誉と教会ノ建設ノタメニナサレルモノデアル〔あの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指す〕」というものである。この第三の形態の神の言葉である「教会の成員に課せられた責任」は、近代以降の現在においては、「十六世紀および十七世紀において強調したよりももっと強く……強調する必要がある」。その「責任は、原則的に……特別聖書に通暁している者に対してだけでなく」、第三の形態の神の言葉である「**教会のすべての成員に対して課せられている**」。「聖書の言葉と彼自身の間に割り入り、彼に対して解釈と適用の奉仕

をしてくれる第三者〔全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えを行う、「人間に対する奉仕者」、「聖書に対する奉仕者」としての第三者〕……の奉仕によって生きないような者はひとりもないのである。このような訳で、第三の形態の神の言葉である「**教会全体はまさにこの仲介する奉仕を果たす組織体であるということができる**」。したがって、神学が教会の宣教の一つの補助的機能としてある以上、「教授でないものも、牧師でないものも、彼らの教授や牧師の神学が悪しき神学でなく、良き神学であるということに対して、共同の責任を負っている」(『啓示・教会・神学』)。第二の形態の神の言葉である「聖書は、特別な役職に対してではなく、むしろ教会全体に対して与えられている」。第三の形態の神の言葉である「教会の中のすべての者が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書を解釈し、適用すべき責任はまた自分に対しても課せられているということを知る時に初めて、……あの役職の中でなされる、あるいはなされないことについての意味深い批判があり得るのである」。したがって、第二の形態の神の言葉である「**聖書に通暁している者たちに相対して、未熟な教会、聖書説明という点で受け身的な教会は、ひそかに既に〔第二の形態の神の言葉である聖書に〕反逆している教会であり**」、それ故に第二の形態の神の言葉である「**聖書正典と〔第三の形態の神の言葉である教会の<客観的な>〕信仰告白、それと共に〔起源的な第一の形態の〕神の言葉および信仰**〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕と、**縁を切った教会、それであるからそもそも、もはやイエス・キリストの教会**〔イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す教会〕**ではないものである**」。したがって、そのような第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会は、「直接的な、絶対的な、内容的な権威と自由」を、その人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の「神の言葉としての聖書について主張しない教会である」、それ故に「教会の中での権威〔人間的な教育的権威〕と自由」を、その人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉である「**聖書の権威と自由……を通して間接的・相対的・形式的な権威と自由として、限界づけられている**」ことを認識し自覚しないところの、「反逆を犯している教会、反逆している教会である」。「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>を認識し自覚することなく、越権して、「彼岸の消尽点が画の中に移され、神自身が人間の霊魂的な、また歴史的な現実の構成要素となり、従ってもはや神ならぬもの、偶像となる〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化され「存在者レベルでの神」、人間の意味世界・物語世界・神話世界、偶像となる〕。これが特に危険な反乱であり、神への『反逆』である。その危険なわけは、それが、ごうまんにも神を忘れた公然たる反抗として行われず、実に神の名において〔実に人間的理性や人間的欲求やによって恣

意的独断的に対象化され客体化され「存在者レベルでの神」、偶像の名において〕、
〔その〕神の呼びかけのもとに行われるからである」（E・トゥルナイゼン『ドストエ
フスキー』）。